時評

日本経済の昨日と今日

―ヒューマニズムからエゴイズムへ―

坂本武人

一

「不況」という二字が、一日としてマスコミに登場しない日のなかったことが、昨年の日本経済の特質であった。

年あらたまった今年も、本質的には、事態の大幅な改善は見られそうにもない。

つい、四、五年前まで、高度成長を謳歌し、「GNP世界第二位」とか「一九八〇年代は日本の時代」といった言葉に酔い、日本経済の発展のみを信じてきた人々、あるいは、現に「不況」により倒産の憂き目にさらされ、失業の日々を送っている人々にとって、一日も早く、通りすぎて欲しい事態であろう。

二

多くの人々によって「克服」が求められている「不況」は、何によってひき起こされたのか。最も理解しやすい、具体的な原因として、「かたかな」で表わされる三つの「衝撃」をあげることができる。すなわち、昭和四十六年の「ニクソン・ショック」と、これに続く「ドル・ショック」、および、昭和四十八年の「オイル・ショック」である。

しかし、これら、外からの「衝撃＝ショック」は、現在の不況の直接的、表面的な要因であり、より本質的、根元的なものが、日本経済そのものの中に内在していたといえる。それを、私は、経済活動におけるヒューマニズムの喪失と、エゴイズムの拡大と規定する

ことができると考えている。

この点について、一言説明を加えると、市民社会における経済活動は、もともと、それぞれの個人が、自からの利益のために、自由に行動することがたて前となっているが、反面、それは、商品という他人（社会）に役立つものを生産しなくてはならない特性を持っている。つまり、自分のため（エゴイズム）と他人のため（ヒューマニズム）という二つの課題をバランスさせ、同時に達成するものでなければ、市民社会における経済の成長、発展は望めないものである。しかるに、最近の日本経済（ひとり日本のみならず、世界的な風潮であるが）は、エゴ一点張りの様相を示すようになってきた。ここに、現在の「不況」の根本要因があるといえる。

三

戦後の日本経済は、物価の高騰、公害の発生など「エゴ」に触発されたさまざまな問題を有し、人々から金と自然と健康を奪いながらも、反面、目ざましい成長、発展を遂げ、人々に多くのものを与えることによって、飢えや寒さから解放すると共に、不便や不自由を少なくさせるヒューマンな内容をも有していた。私は、これを、「与えつつ奪う」経済と呼んでいる。

ところが、昭和四十五、六年頃から、国内では、それまでの「物中心」の生活から「物ばなれ」のくらしを求める気運が高まり、これにつれて、「物」を手に入れることに向けていた社会的エネルギーは、「物」の生産、あるいは消費過程で発生する、さまざまな問題の解決を迫る住民運動、消費者運動に転化する気配をはっきりと示すようになった。また、海外からは、すでに述べた「ニクソン・ショック」、「ドル・ショック」に代表される輸入制限を計る措置が講ぜられ、経済活動を盛んにして、「与えつつ奪い」繁栄する経済の行く手に黒い陰がみえはじめていた。そして、これに決定的な影響を与えたのが「オイル・ショック」であった。

四

「与えつつ奪う」経済活動に行きづまりの生じたことを知るや、経済界は、今まで以上に大きな社会的使命価値を作り上げ、それを克服する手段を取ろうとせず、それぞれが、それぞれの「エゴ」を最大限に発揮すべく、土地をはじめ、すでに社会的な存在となっているものの占有を計り、その価格のつり上げを求めた。これが昭和四十六年以来の「買いだめ」さわぎとなり、昭和四十八・九年の「物不足」パニックとなった。

一国の経済が、社会の求めるものを生産し、供給するために使用してきた力を、社会が求めるものを取り上げ、その値上がりを計るために傾注するようになれば、当然、そこには「不況」の中の「物価高」（スタグフレーション）を生み出すことになる。私は、このような状況を「奪いつつ奪う」経済と名付け、エゴイズム一点張りの社会と呼ぶことができると考える。

五

生産よりも分配に、与えることよりも奪うことに勢力を使っている限り、経済的な「不況」も、社会的「不公正」も、拡大こそすれ、

縮小することはない。そして、物価と不安はいやが上にも急騰する。

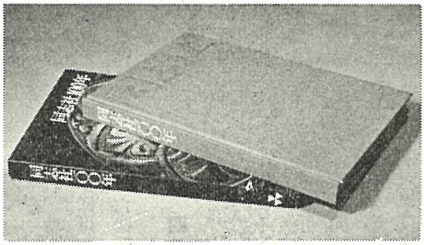
物価高と先き行き不安が存在する限り、生産も消費も沈滞し、「不況」に輪をかける。この悪循環を自力でたち切る可能性は、今の経済界には、残念ながら見当たらず、実質賃金の引き下げや生産制限など、「不況」の火に油を注ぐ、姑息な手段を講じている。このような状況の下にあって、「不況」対策は、結局、ケインズ以来の伝統を受けつぎ、政府（財政）主導型にならざるを得ないものとされている。しかし、財政は、「不況」の中で大きく落ち込み、いまや火の車同然であり、不況対策をすすめるために国債発行、増税、公共料金の引き上げ、福祉見直し（切り捨て）をあえて行わざるを得ない事態に立ち至っている。

かくて、エゴ一点張りの経済の下、国民の生活は、ここしばらく大いなる犠牲を強いられ、一層の節約が求められる。しかし、これらには限度がある。市民はいつまでも小羊のように従順なものとして犠牲に甘んずることなく、この辺で、「奪う」体制から「与える」ものへ、エゴイズムからヒューマニズムへ、経済活動の在り方を百八十度転換させる主体となることを真剣に考えなくてはならないように思う。

（女子大学教授・経済学・家庭経済学概論）

写真集『同志社100年』刊行

同志社は新島襄をはじめ、百年にわたる諸先輩の努力によって受け継がれてきた貴重な文化的遺産を有している。また、北は北海道から、南は九州熊本にいたる全国各地に、さらに、遠くアメリカの地、ボストンを中心とするニューイングランド地方にまでも、新島襄ゆかりの多くの遺跡を現存している。これら貴重な文化的遺物・遺跡を、百年を迎えた同志社人が内外に探訪し、カメラの眼を通してできるだけ広く記録し、さらに現在の同志社の生きた姿をありのままにとらえて後世に伝えたい意図のもとに、写真集『同志社一〇〇年』が、創立百周年記念事業の一つとして企画され、今回刊行をみたわけで、次の内容のある写真が、現在可能な限りの優秀なカメラ・ワークと印刷技術を通して、編さん、収録されている。



内容　第1部　同志社のキャンパスと建物
第2部　同志社の現在
第3部　同志社の遺跡・遺物

体裁　豪華上製本（総クロス貼　化粧ケース付　頒価一二、〇〇〇円〔送料八〇〇円〕）
並製本（上質紙貼　頒価九、〇〇〇円〔送料八〇〇円〕）
A4判　二〇〇頁（カラー九十三点　モノクローム七十二点）
高級美術印刷　オフセット多色刷

なお、『同志社一〇〇年』の別冊ともいえる『同志社―その一〇〇年のあゆみ』（上製本・並製本）も同時に刊行された。

発行所　学校法人　同志社
印刷製本　日本写真印刷株式会社
発売方法　同志社収益事業課